

令和2年11月20日

横浜市立浦舟特別支援学校

# 連携支援だより



浦舟特別支援学校は、横浜市立で唯一の病弱教育を行う特別支援学校です。連携支援だよりを通じて、本校の紹介や研修会のお知らせ、また研修会の様子などをお伝えさせていただきます。

第1回「病弱教育と人権」がテーマの研修会は、今年度は新型コロナウイルス感染症対策により6月に予定をしておりましたが、残念ながら中止となりました。

そこで、第2回の研修会については、10月28日(水)本校施設と花咲研修室をつなぎ、オンライン（Zoom）で開催いたしました。社会福祉法人青い鳥東部地域療育センター所長高橋雄一氏をお招きし、「学校と医療の連携～自分を傷つける子どもたち～」というテーマでご講演いただきました。花咲研修室には、40名を超える市内の様々な校種の先生方が参加してくださいました。では、その概要を少しご紹介したいと思います。



## ～療育センターの概要～

療育センターには、地域支援部門・外来部門・通園部門の3つの部門があります。現在、横浜市内の療育センター通園部門には、定員を超えて多くの利用希望があり、受け入れが困難な状況にあるようです。受診例としては、乳幼児期に保護者が言葉の遅れを心配して相談するケース、学齢児期に特別支援教育総合センターでの発達検査の判定後、診断目的で受診するケースなど様々なようです。



## ～強度行動障害の背景にある特性の理解「冰山モデル」～

子どもが自分を傷つける行動を理解する上で、大事にしたい視点として「冰山モデル」があります。課題となる行動にだけ注目するのではなく、氷山の一角と捉えて、その水面下の要因に着目するというものです。具体的には、強度行動障害を示す行動の背景にあるものを捉え、要因を除去・軽減していき(環境調整など)、よい方向に向かうように支援をしていきます。そのために、子どもの行動を細かに見て、行動障害が出やすい傾向、落ち着きやすい働きかけの傾向等をこまめに記録し、対応していくことが大切です。また、学校での行動記録は、医学的診断をするときにも重要な記録になるとのお話でした。

## ～子どもの自傷・自殺～

平成30年厚生労働省の調べによると、「思春期以降の死因の第1位は自殺」ということがわかっています。自殺の原因は、学校問題（入試の悩み、進路の悩み等）、家庭問題（親子関係不和、家族からのしつけ等）、健康問題、男女問題等があります。

子どもはSOSを言葉で発信するのが苦手です。つらい時に誰かに相談をするというより、身体症状や行動の問題として表に出てくる場合が少なくありません。このような子どもの心理特性を踏まえ、教員は常にアンテナを張っておく必要があります。ただし、子どものSOSは激しいパニックや暴力のような目立つものだけではありません。沈黙する子どもの極めて軽微なサインにも気づけるようにすることが大切です。

また、逆境的小児期体験をし（心理的虐待、身体的虐待、性的虐待、ネグレクト等）、心に非常に強い衝撃を受け、その体験が精神的な影響を与え続けるために強度行動障害を示すケースもあります。傍から見ると特に誤った対応でなくても、それがリマインダーとなり不安や恐怖を感じ、パニックに陥ることもあるため、医療者に限らず、教員の私たちにもトラウマの影響を理解しながら適切に対応する“トラウマインフォームド・ケア”の視点に立った丁寧な対応が求められます。



## ～相談従事者に求められる態度～

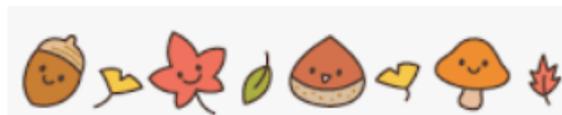
次のようなポイントをお話いただきました。

- \*受容と共感
- \*静かで穏やかな対応・傾聴
- \*来談したこと、話をしてくれたことをねぎらう
- \*支援を表明し、約束する
- \*批判しない、叱責しない、説教しない
- \*安易な励ましや安請け合いをしない
- \*説明や提案は明確に行う
- \*一人で抱え込まずに、チームで対応する

内容がとても充実した、大変有意義な研修会となりました。

花咲研修室でご参加された先生方、オンラインでの受講のご協力ありがとうございました。

今年度の研修会は今回のみとなりましたが、また次年度の研修会に向けて計画を立てていきたいと思えます。



病気などが理由で、市内の病院に入院しているお子さん、登校ができていても病気に対する配慮が必要なお子さんについて、教育相談を受け付けています。

学校からだけでなく保護者からの相談も受け付けていますので、是非ご紹介ください。

担当：浦舟特別支援学校 特別支援教育コーディネーター 荻野 TEL243-2624